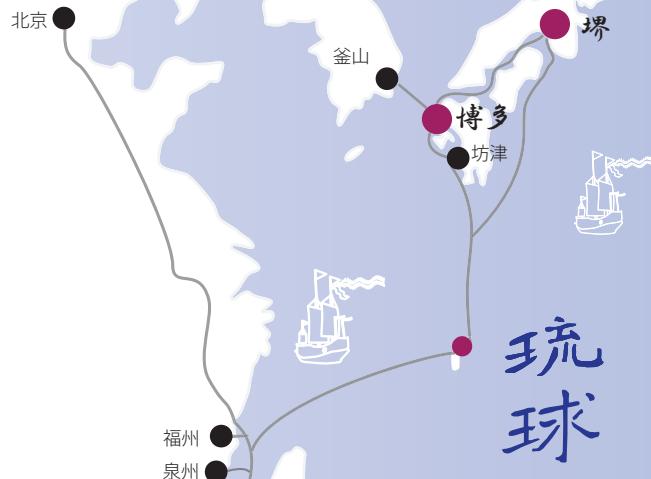


日
城



琉
球

大交易時代の

琉 球 と

日 本



沖縄県立埋蔵文化財センター

2019年 2月19日火 ▶ 5月12日日

目 次

ごあいさつ	1
首里城「京の内」とは	2
「首里城京の内跡出土品」について	3
コラム 1. どのようにして保存修理工事が行われるの？	4
大交易時代の琉球と日本	5
コラム 2. 京の内出土のクメール陶器	7
/ コラム 3. 「天上人間」銘鐘の謎	8
琉球から日本へ運んだ交易品	9
コラム 4. 琉球銭の製作方法	10
/ コラム 5. 首里城内の螺鈿・漆器製作	11
日本からもたらされたもの	12
コラム 6. 首里城における金属製品の生産	13
重要文化財指定基準 / 重要文化財指定の名称と指定理由	14
重要文化財首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	15
首里城京の内関連年表	16
引用・参考文献	17

【凡例】

1. 本図録は、重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展『大交易時代の琉球と日本』（開催期間：平成 31 年 2 月 19 日～5 月 12 日）の展示を補完するものとして、編集・作成しました。
2. 企画及び原稿執筆は、新垣力・瀬戸哲也・金城貴子・久高健が行い、その他必要に応じて本文に記載させていただきました。
3. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本図録に記載されている資料名が一部異なるものが存在します。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものです。

ごあいさつ

昭和47(1972)年5月15日の本土復帰の日に国指定史跡となった首里城跡は、琉球王国の王城として450年余の長きにわたって沖縄の歴史・文化の中心でありました。

この首里城の中で「京の内」と称された区域は、正殿や北殿など政治を行う区域とは離れた内郭の南西地域にあり、文献や伝承に拠りますと首里城の聖域空間として、国王の即位式をはじめ琉球王国の重要な儀式や祭司がおこなわれた空間とされ、「神が降臨する聖域」と考えられております。

沖縄県教育委員会が「京の内」の規模や遺構変遷などの解明を目的として、平成6(1994)年度から平成9(1997)年度に実施した発掘調査において、1459年に消失した倉庫跡が発見されました。

この倉庫跡からは、中国やタイ、ベトナム、日本などを産地とする数多くの陶磁器や金属・ガラス製品などが出土しております。これらは、まさに首里城に掲げられていた「以舟楫為万国之津梁異産至宝充滿（船舶を諸国と結ぶ架け橋とすることによって、異国の宝物類が国中に充满する）」の刻銘がある「万国津梁の鐘」(1458年鑄造)の銘文を彷彿させる、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄を示す貴重な資料となっております。

のことなどから、出土した陶磁器518点や金属製品一括・ガラス玉一括は、沖縄県で初めて考古資料の部で平成12(2000)年に国の重要文化財に指定されました。

本展では、これらの国指定の重要文化財を中心に一般公開いたします。

本年は、1879年に琉球藩が廃され沖縄県が設置された廢藩置県から数え、丁度140年目となります。この機会に多くの方々が本展をご覧頂き、大交易時代の琉球王国の繁栄とダイナミックさを実感していただきますとともに、郷土の歴史や埋蔵文化財への理解が一層深まることとなれば幸いです。

平成31年2月19日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 登川安政

首里城「京の内」とは

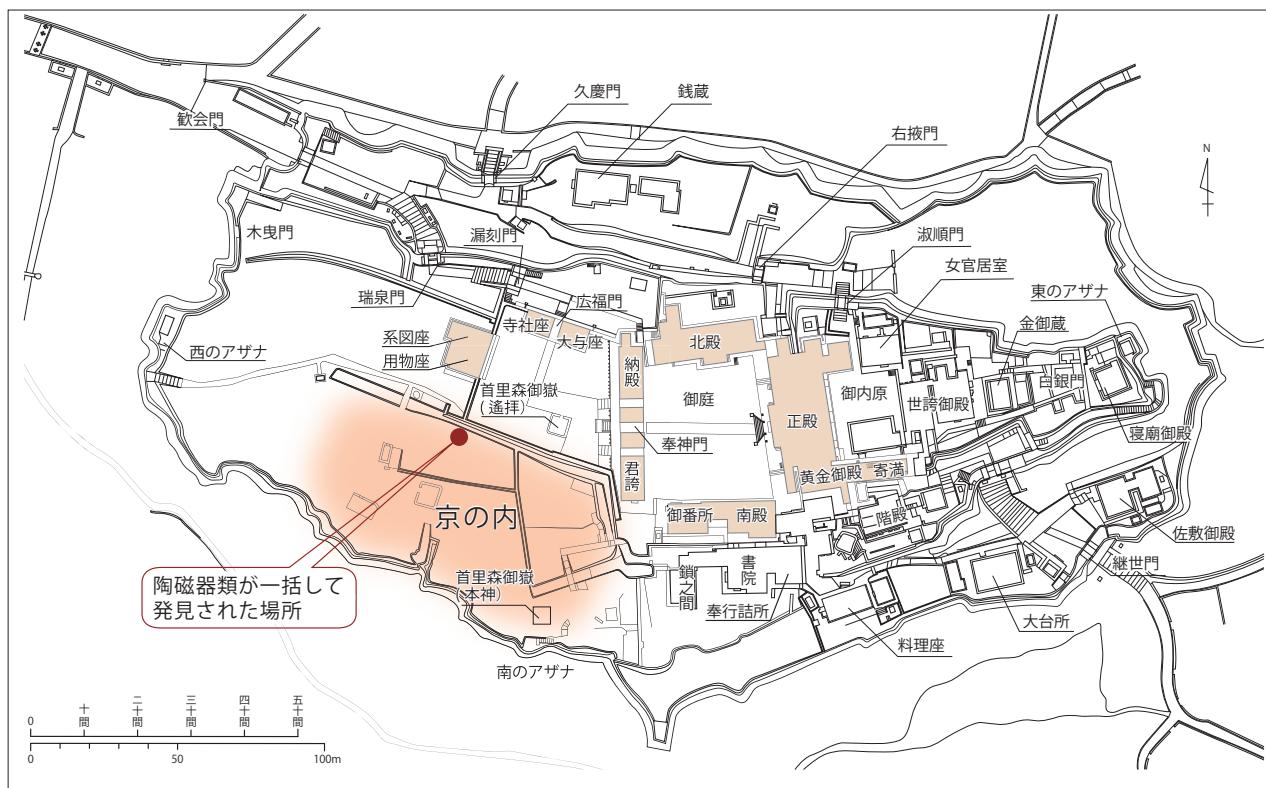
首里城内は、政を司る正殿一帯と、国王のプライベート空間である御内原、聖域空間である京の内に大きく分けることができます。京の内は、首里城内の南西側を占める面積約5,000m²の区画を指します。

琉球王国の正史、『中山世鑑』に記されている琉球の創世神話によると、天上に住む天帝の指示を受けた創世神アマミクが辺戸の安須森から最良の聖地を求めて南下しつつ、今帰仁カナヒヤブ、知念森、斎場嶽、藪薩の浦原、玉城アマツヅ、久高コバウ森と巡り、首里城の首里森グスク、真玉森グスクの御嶽を創設するとともに、琉球の島々をつくります。

京の内は、アマミクが最後に降り立った場所であり、琉球最高の聖域として認められた場所です。ここでの「京」は、靈力（セジ・シジ）と同義とされています。歴代の国王は、この最適の地に造った首里城を行政と祭祀の中心としました。

王府の神女・女官関係の文書がまとめられた『女官御双紙』には、首里城内に10箇所の御嶽があるとされています。これらは城内の東西南北、南東、南西、北東、北西のほか、上下に配置されており、ありとあらゆる方向の守りとしたと考えられます。これらの御嶽において、祭祀を司る多くの神女たちは、国王が未永く優れた存在であり続けられるよう祈りました。この様子は、『おもろさうし』の中にうたわれています。

このような背景から、京の内跡から出土した遺物の数々は、城内で執り行われた祭祀に用いられた可能性を示しているのです。



首里城平面図

横内家資料平面図（明治初期）をトレース・加筆

「首里城京の内跡出土品」について

重要文化財「首里城京の内跡出土品」とは、首里城内で最も重要な聖域であった「京の内」地区の発掘調査によって発見された資料の中でも、平成6年度の調査によって発掘された倉庫跡（1459年の火災で焼失）から出土した資料です。これらは平成12（2000）年に、沖縄県で初めて国の重要文化財（考古資料）として指定を受けました。

沖縄県教育庁では、首里城跡の復元整備を行う目的で、昭和47（1972）年を最初として、長年、首里城跡の発掘調査を実施してきました。「京の内」地区については、平成6（1994）年度から平成9（1997）年度までの4か年間発掘調査を実施しました。

発掘調査により様々な遺構や遺物が発見されましたが、特に注目されたのが、15世紀中頃の土坑SK01と称される倉庫跡です。倉庫跡は入口から室内へ下る階段が確認されたほか、土坑内からは大量の陶磁器類が出土しました。

これらの陶磁器を調べると、以下のような特徴がわかりました。

- ①中国産陶磁器を中心にタイ、ベトナム、日本産の製品があり、古くは14世紀中頃の製品もみられるものの、主体は15世紀初頭～中頃の製品である。これらの陶磁器は、交易によって琉球に運ばれたものと考えられ、まさに中継貿易で栄えたかつての琉球王国の歴史を伝えるものと言える。
- ②出土した陶磁器の中には、世界でも数点しか見つかっていない紅釉水注や、世界的に類例のみられない青花の大合子など、世界的にも稀少な製品が含まれる。
- ③出土した遺物の多くに、火熱を受けた痕跡が確認された。この痕跡を手掛かりに、陶磁器の年代観や首里城で発生した火災に関する記録を調べた結果、土坑SK01は天順3（1459）年に火災で焼失した倉庫跡と判断された。

このような重要性に鑑み、平成12（2000）年6月27日付けで「首里城京の内跡出土陶磁器」518点が国の重要文化財（考古資料）の指定を受けました。あわせて金属製品やガラス玉についても一括で指定を受けました。

当センターでは、重要文化財を長期的に保存し、国民共有の財産として公開、活用を図るために、文化庁の補助を受け、保存修理事業を実施しています。平成16（2004）年度から始まった本事業では、これまでに陶磁器と金属製品をあわせて200点を超える資料の修理が完了し、適切に保存管理を行っています。



京の内跡出土陶磁器

どのようにして保存修理が行われるの？



重要文化財の保存修理はどのように行われているのでしょうか？

陶磁器 ほとんどは破片の状態で発掘され、そのうち器形復元ができるものについては、過去の資料整理の段階で、石膏を用いて全形の復元を行っていました。しかし石膏は耐用年数が短いため、より適切な保存と活用を図るために、耐久性と強度のある樹脂への置き換えを進めています。



陶磁器の現状を調査した後に解体し、その後表面に付着した新しい汚れ（石膏など）を除去する。



実測図や参考資料等より全体の形状を検証しながら形を作る。



復元部分が実物部分と違和感なく、かつ両者の判別ができる様に補彩を行い、仕上げる。

金属製品 陶磁器と異なり、全形のうかがえる資料が多数みられますが、鏽などによる劣化が著しく、一部には早急な保存処理が必要な製品もありました。接合が可能な資料については復元を進める場合もあります。



製品の表面観察とともに、X線写真を撮影し、内部の状態を調査。



鏽などを除去した後に防鏽処理や補強のための樹脂充填を行う。

保存修理された資料は、当センター内の特別収蔵庫で適切に保管しており、毎年開催する「重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展」などで活用しています。

大交易時代の琉球と日本

現在は沖縄県立博物館・美術館で展示されています、かつて1458年に造られたとされる首里城正殿に掛けられていた、いわゆる「万国津梁の鐘」には次のような文章が漢文で刻まれています。

「琉球國は南海の勝地にして、三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車となし、日域を以て唇齒となす。此の中间にありて湧出せる蓬萊島なり。舟楫を以て万国の津梁となし、異產至宝は十方刹に充備せり。」（読み下し文）

この意味は、琉球が朝鮮や中国、日本と密接に関係を結び、船によって交易を行うことで、国々の架け橋として異国の宝物で満ちた理想の島ということをうたっており、15世紀頃の琉球国が交易によって繁栄していた「大交易時代」であったことを裏付けるものとされています。首里城京の内跡を中心に出土する中国・朝鮮・ベトナムで作られた焼き物の高級品は、まさにその宝物の一部であったと言えましょう。また、大量に出土するタイで作られた大小の壺の中には、泡盛の原型とされる「香花酒」、または胡椒などの香辛料など、珍しい品々が入っていたかもしれません。



陶磁器の一部



代表的なタイ産・ベトナム産のやきもの

それでは、なぜ琉球は大交易時代を迎えることが出来たのでしょうか。1368年に建国された明は、その政情安定のために倭寇対策の一環として自国の商人に対して海禁政策をとっており、対外交易は明への朝貢を行った国に限っていました。そのため、日本にも倭寇対策のため朝貢を促しており、室町幕府の足利義満などが応じましたが、以前と比べると中国との交易頻度は少なくなっていました。そこで琉球はその状況を生かし、中国で得られた絹織物や陶磁器を日本や東南アジアへ運び、各地の特産品を仕入れ、それを中国への朝貢品とするというように、アジア間での中継貿易を行ったのです。

この大交易時代の琉球では、日本で作られた刀や屏風、扇などを仕入れてそれを中国への朝貢品としていたと考えられています。しかし、首里城などで出土している日本産の焼き物の出土量は、中国や東南アジア産のものと比べるとそれほど多くありません。それでは、当時の琉球と日本は単なる交易相手であって、現在のようにお互い人々が訪れ滞在し、時には移住したりするなどの深い交流はなかったのでしょうか？

その答の一つには、やはりこの首里城正殿に掛けられていた鐘にあります。先の文章の続きには、この鐘は尚泰久王が相国寺の住職である溪隱（安潛）にこの文章を考えさせ、鐘自体は藤原國善という鑄物師に作らせたことが記されております。二人の人物は日本人と考えられており、鐘の形や文様から九州北部の特徴を示しており、まさに日本の鐘が掛けられていたのです。

文献史料による琉球史研究では、当時の琉球における対外交易は日本人、特に禪宗という仏教の僧侶が大きく関係していたと考えられており、役人や祭祀を行なう神女（ノロ）を任命する文書には平仮名が使われています。また、近年の調査研究では、琉球における対外との玄関口であった那覇港は14世紀には存在し、中国人のほか多くの日本人も居住しており、15世紀には首里・那覇には日本僧が関係した多くの寺院があったことが明らかになってきています。その証拠として、首里城や寺院に掛けられていた鐘は今も10個以上が沖縄県内に残されており、首里城正殿跡の発掘調査では沖縄戦の被害を受けて破片となったものが出土しております。

今回は、琉球が繁栄していた大交易時代の日本との様々な交流や関係について、首里城京の内跡出土品を中心に、関係する出土品なども加えながら展示紹介していくたいと思います。



琉球とアジア間の交易図

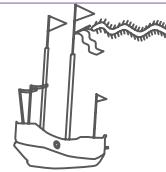


那覇港北岸の渡地村跡の調査



首里城北側隣接の円覚寺跡の調査

京の内出土のクメール陶器



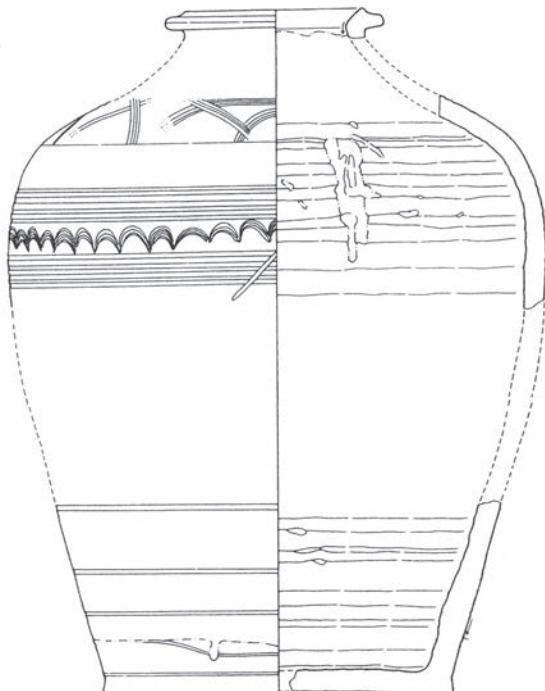
京の内からは、最少で76個体のタイ産褐釉陶器が出土しています。これらの器種は貯蔵や運搬に用いたと考えられる壺で占められており、生産地はスコータイ県のシーサッチャナライ窯とシンブリ県のメナムノイ窯がほとんどですが、この中に1個体だけ他と違った特徴を持つ製品があります。



クメール陶器

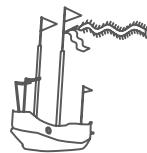
この製品については、調査報告書が刊行された当初から従来の資料とは異なると指摘されていましたが、近年の研究によりタイのブリラム県で生産されたものであることが判明しました。この地域は、タイの東隣に接するクメール王朝（現カンボジア）の版図が西側（タイ側）に広がっていた頃の支配領域であり、陶器の生産技術もクメール文化の影響を受けていることから、京の内出土資料はクメール陶器と位置づけられます。

京の内出土のクメール陶器は、タイを含む東南アジア地域以外で出土した初の事例であり、しかも年代の推定できる非常に貴重な資料とされています。またこの製品は、他のタイ産褐釉陶器と同じく、中に貿易品を納めるコンテナの役割を果たしたと考えられており、15世紀に琉球王国が南海地域で展開した中継貿易の実相を知る上でも重要といえます。



復元図

「天上人間」銘鐘の謎



首里城正殿の発掘調査は沖縄県教育委員会により昭和60・61(1985・1986)年度に行われました。この調査では、戦前にあった正殿は数度の改修が行われたことなど様々な成果が得られました。その中で、表面が溶けたようにただれた鐘の破片が163点出土しました。正殿跡には直径9mにも及ぶ大きな穴が見られ、沖縄戦時の砲弾が落とされたことによりあいたと考えられることから爆弾穴と称され、鐘の破片はここを中心に出土しています。つまり、この鐘の破片は沖縄戦の砲火による戦災の生き証人です。

しかし、先に述べたようにかつて首里城正殿には現存する「万国津梁の鐘」が掛けられていたはずであり、首里城にもう一つ鐘があったということでしょうか。この謎について、当時の調査担当者であった上原靜さんは、この鐘の破片の中に「天上人間」と読める字に注目しました。そして、首里王府が1731年にまとめた琉球の地誌『琉球國旧記』に、「天上人間」を含んだ銘が記された鐘が相国寺にあったことを突き止めました。

【文意】尚徳王が一四六九年に国の安定と万民の幸せを願つて铸造させ相国寺に寄進したことを、僧溪隱が記した。

七妙端鑄霧虞歲說力琉
日法扣就霖之安偈新球
住音起高雨化國以鑄國
持時群樓之全利銘巨君
溪成生掛秋文民之鐘世
隱化夢肅茲偃聖祝喜高
記己天万有武天王捨王
之丑上機巨賢子基相乘
十人人心鐘宰繼之國大
月間無新相唐万寺願



正殿出土梵鐘「天上人間」の拓本

ところが、1713年の地誌『琉球國由来記』には、「相国寺は廢寺になっており鐘は天界寺に移された」との内容が記されており、戦前まで首里城正殿を拝殿とした沖縄神社に保管されていたようです。

このように、「天上人間」という文字が残された鐘の破片は琉球・沖縄の盛衰を知る重要な資料と言えましょう。

琉球から日本へ運んだ交易品

大交易時代には琉球から日本へどのようなものが交易品として運ばれたのでしょうか。琉球史研究では中国で仕入れた様々な商品を日本へ運び、それと引き換えに日本で作られた刀などを購入したと考えられています。ただ、中国の商品と考えられるものの中には、織物なども含まれますが、地中に埋まってしまうと腐ってなくなります。そのため、交易を考える上で重要となる主な出土品は中国産陶磁器となります。

日本に運ばれた中国産陶磁器の具体的なものとして、最も盛んに交易がおこなわれていたと考えられる 15 世紀のものとしては、浙江省龍泉窯で生産された青磁が考えられ、首里城京の内跡を始め県内各地で大量に出土しております。その代表的なものとして、雷文帶碗、酒会壺、稜花または花弁形の皿や盤が挙げられます。

これらの陶磁器は日本各地でも出土しておりますが、その量は中国産陶磁器がピークであった 12・13 世紀には及びません。それは、日本最大の貿易港である博多でも同様です。そこで、先に紹介した九州北部の鐘が琉球に見られるようになることを踏まえると、陶磁器は琉球を経由して博多などへもたらされたことが考えられるのです。一方、堺では琉球と同様に 15 世紀の陶磁器が多く、青磁だけでなく県内で多く出土する中国・タイ産陶器の壺が見られるようになります。このことは、博多以外に堺も琉球との交易に深く関わった事が想定されるのです。



中国産陶磁器



雷文帶碗



酒会壺



稜花盤

陶磁器以外に、中国銭も琉球から日本へもたらされた可能性が考えられます。県内で最も出土量の多い中国銭は洪武通寶や永樂通寶といった明錢です。ただ、本土で多いのはそれより古い北宋錢なのです。しかし、博多を始めとした九州では洪武通寶が比較的見られ、戦国時代には、織田信長が旗印にしたのは永樂通寶です。つまり、琉球の大交易時代である15世紀に琉球を経由してこれらの明錢がもたらされていたという可能性があるのです。このころ琉球では、それまで明から与えられていた銅錢が途絶えたためか、尚泰久王が大世通寶、尚徳王が世高通寶を鋳造しており、堺や博多でも出土しています。

中国銭



大中通寶
(初鑄 1361 年)



洪武通寶
(初鑄 1368 年)



永樂通寶
(初鑄 1408 年)

琉球銭



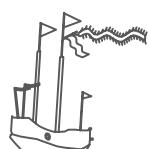
大世通寶
(初鑄 1454 年)



世高通寶
(初鑄 1461 年)

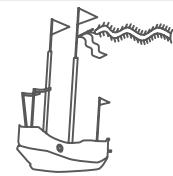
コラム
4

琉球銭の製作方法



今回紹介している大世通寶（初鑄1454年）と世高通寶（初鑄1461年）は、明錢である永樂通寶（初鑄1408年）の「永樂」を削り取り、「大世」や「世高」の文字を嵌め込んだ種錢から起こした鋳型で製作されています。そのため、「大世」・「世高」と「通寶」の字体が異なっているのが特徴です。

首里城内の螺鈿・漆器製作



近年の首里城内の調査では、15～16世紀に螺鈿を製作していたと考えられる大量のヤコウガイの殻や研磨された貝破片が発見されました。これらの螺鈿は漆器に使用されていたと考えられ、それらが日本に運ばれていた可能性もあります。



錢蔵東のヤコウガイ等出土状況



螺鈿片

日本からもたらされたもの

大交易時代の華やかなりし頃、日本から琉球へも様々な文物がもたらされました。このうち、京の内跡出土品を含む首里城跡及び周辺遺跡の発掘調査で得られた資料の中から、該当するものを紹介します。

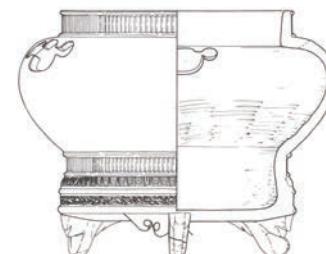
まずは京の内跡出土品にみられる資料として備前産陶器が挙げられます。これは現在の岡山県で生産された硬質の焼締陶器で、京の内跡出土品には擂鉢・壺・甕が確認されています。

次に京の内跡出土品には含まれませんが、首里城跡の他地域や周辺遺跡から発見されている資料として瓦質土器と瀬戸産陶器が挙げられます。瓦質土器は具体的な産地は不明ですが、胎土や文様の特徴から北部九州地域に由来する可能性が指摘されており、器種は火鉢と風炉が確認されています。瀬戸産陶器は現在の愛知県を産地とするもので、代表的な資料に天目がみられます。

上記の資料はいずれも同時期の日本で多数流通しており、日常生活に必要な道具であったと推定できますが、県内での出土例は首里城などの拠点的な遺跡に限られています。その理由のひとつに、当時の日本からもたらされた禅宗の影響が指摘されています。禅宗は茶との関係が深く、天目で茶を飲むという行為が儀礼的にも重要であったため、琉球へも禅宗を通じて天目での喫茶法が伝わったと考えられます。その際、瓦質土器は暖を取る道具として火鉢、湯を沸かす道具として風炉を用いたのでしょう。この他、擂鉢に代表される備前産陶器も、当時の日本における食文化などの一端を示す興味深い資料といえます。



瓦質土器(風炉 口縁部)



風炉の実測図
(青森県尻八館出土)

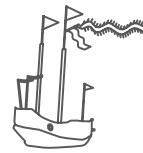


備前産陶器



瀬戸産陶器(天目茶碗)

首里城における金属製品の生産



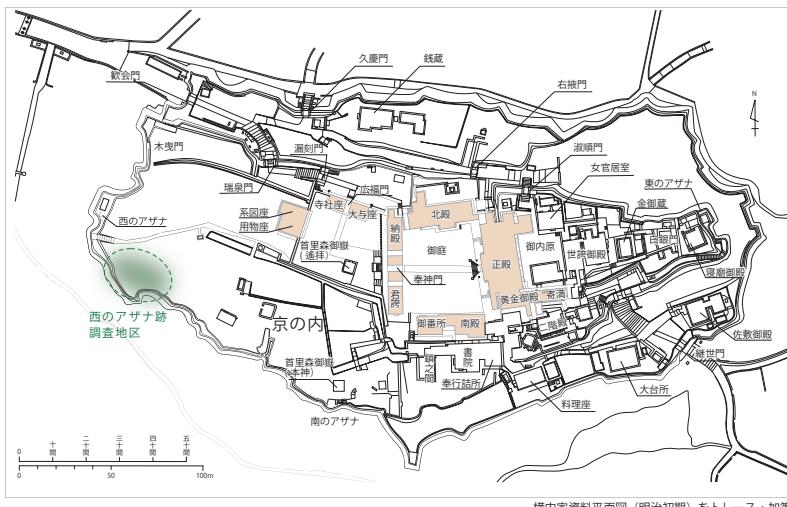
琉球王国の金属製品については、中国や日本から運ばれたものだけでなく、琉球産と考えられる資料が含まれています。近年、これらの製品を製作した可能性の高い工房跡が複数発見されており、その中でも首里城跡西のアザナ地区では特筆すべき成果が得られています。

西のアザナ地区の発掘調査では、遺構に関係する炉跡・鞴羽口・溶解炉のほか、金属生産及び金工品製作に用いた坩堝・金鉗・鋳型・鋳銭・砥石・金床石などが出土しており、15～16世紀に首里城内で金属生産や金工品製作を行っていたことがわかりました。このうち、鋳型には梵鐘や何らかの器物の製作に用いたとみられるものがあり、大小様々な製品を鋳造していたことが確認されました。また、坩堝に付着した金粒の分析により、当該地区では鉄や銅の鍛冶・鋳造に加え、金製品の製作、もしくは鍍金の作業を行っていたことも判明しました。

ところで、これらの金属製品製作に必要な原材料はどこから入手したのでしょうか。当時の琉球王国では産出しておらず、全てを輸入に頼っていたと思われますが、そのヒントとなるものがグスクなどから出土する小割りの銅製品です。例えば首里城跡鎖之間地区からは人為的に細かく破碎した銭貨が多数出土しており、これらを銅製品の原材料として再利用したと考えられます。

西のアザナ地区の金属工房跡は16世紀頃まで稼動したと推定されていますが、その後も首里城内では17世紀前半頃まで小規模な金属生産や金工品製作が行われていました。

17世紀後半以降の様相は現在のところ不明ですが、この頃は城外の首里・那覇地域に金属工房が展開していく時期もあり、首里城内の金属工房は役割を終えたのかもしれません。



首里城西のアザナ跡調査地区位置図



炉跡

重要文化財指定基準

◎ 考古資料の部

重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鐸、銅劍、銅鉢その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衙・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○国宝及び重要文化財指定基準、・(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会 告示第2号)〔最終改正〕平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所 有 者：沖縄県(沖縄県立埋蔵文化財センター保管)

(府保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成)

説明文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は靈力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である聞得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6~7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に2点と景德鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が國中に充満する」(訳文の趣旨)とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

(文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋)

※官報告示：平成12年6月27日付け文部省告示第120号

※文化財保護法(昭和25年法律第214号)第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財 考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

<small>つけたり</small> 附 一、金属製品 <small>つけたり</small> 附 一、ガラス玉	一括 一括
--	--------------

重要文化財 陶磁器内訳

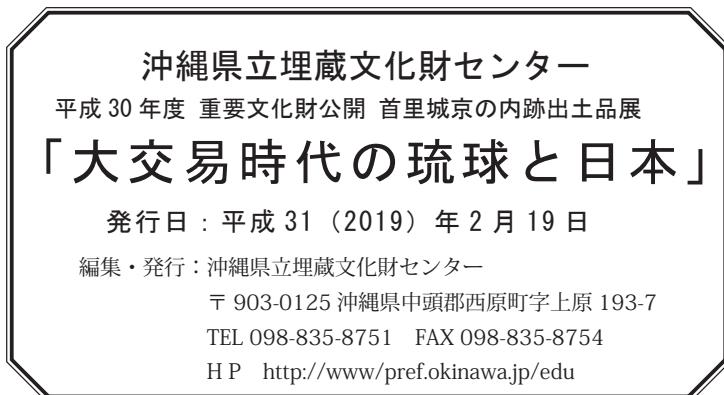
種類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青磁 (289 点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	大鉢 1
白磁 (33 点)	碗 14	皿 11	杯 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付 (2 点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付 (58 点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵 (3 点)	碗 2	皿 1	
紅釉 (1 点)	水注 1		
瑠璃釉 (2 点)	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器 (1 点)	碗 1		
褐釉陶器 (35 点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	蓋 1		
白釉陶器 (3 点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器 (55 点)	壺 55		
タイ産半練土器 (22 点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器 (3 点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか (本土産) (6 点)	擂鉢 1	かめ 3	壺 2
瓦質土器 (沖縄産) (5 点)	蓋 5		
合計 518 点			

首里城京の内閣連年表

代	朝	時	室
第 二 尚 氏	明	第 一 尚 氏	第 二 尚 氏
第 三 尚 氏	元	第 四 尚 氏	第 三 尚 氏
第 五 尚 氏	宋	第 六 尚 氏	第 五 尚 氏
第 六 尚 氏	中国	第 七 尚 氏	第 六 尚 氏
第 七 尚 氏	琉球		
	京 の 内 の 遺 物		中国・沖縄の主な流れ
1400			
1500			
1300			
1200			

《引用・参考文献》

- 新垣力 2005「首里城出土の茶道具にみる琉球の喫茶」『淡交社』No.728 淡交社
- 池田榮史 2006「沖縄出土の備前焼」『備前市歴史民俗資料館紀要』8 備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会
- 伊藤嘉章 1994「和物天目－瀬戸・美濃窯における天目の展開－」『唐物天目－福建省建窑出土天目と日本伝世の天目－』福建省博物館・茶道資料館
- 上里隆史 2012『海の王国・琉球』洋泉社（新装版が2018年ボーダーインクより出版）
- 上原靜 1997「首里城正殿跡出土の相国寺巨鐘」沖縄国際大学大学院
- 上原靜 2009「首里城西のアザナ跡の鍛冶・鋳造工房」『紀要沖縄埋文研究』6 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 大庭康時 2011「中世後半の出土銭貨を中心とした博多遺跡群の考古学的成果」『博多研究会誌20周年記念特別号』博多研究会
- 沖縄県教育委員会 1985『金石文－歴史資料調査報告V－』
- 沖縄県教育委員会 1995『沖縄の文化財III』
- 沖縄県教育委員会 2011『沖縄県史 各論編3 古琉球』
- 沖縄県教育庁文化課（編） 2011『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『特別企画展 首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『首里城跡－銭蔵東地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター第80集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『首里城跡－正殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター第82集
- 沖縄タイムス社 1983『沖縄大百科事典』
- 金武正紀 1991「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁』第11号 日本貿易陶磁研究会
- 沓名貴彦 2018「首里城西のアザナ跡出土金工品生産関連遺物類の非破壊調査について」『南島考古』第37号 沖縄考古学会
- 久保智康 2010『日本の美術 第533号 琉球の金工』ぎょうせい
- 尻八館調査委員会 1981『尻八館調査報告書』
- 瀬戸哲也 2009「南の境界・琉球の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
- 高良倉吉 1998『アジアのなかの琉球王国』吉川弘文館
- 知名定寛 2008『琉球弧叢書⑩ 琉球仏教史の研究』榕樹書林
- 續伸一郎 2011「堺環濠都市遺跡における流通の様相」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院
- 永井久美男（編） 1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会
- 奈良文化財研究所・早稲田大学文化財総合調査研究所（編） 2017『ヴィール・スヴァイ窯跡群1号窯発掘調査報告書』奈良文化財研究所
- 向井亘 2008「第3章 海域アジアの貿易陶磁とコンテナ陶磁」『モノから見た海域アジア史－モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流－』九州大学出版会
- 向井亘 2009「タイの陶磁史（二）－ブリラム陶磁器－」『陶説』第676号 日本陶磁協会



関連行事のご案内 予約不要・参加無料

◆◆ 文化講座 ◆◆

日時：3月23日(土) 13:30～16:15（開場 13:00）

会場：研修室 定員：先着 100名

内容：「出土した陶磁器からみた琉球と堺の交易」

續 伸一郎（堺市博物館 学芸課主幹）

「大交易時代と博多」

大庭 康時（福岡市埋蔵文化財課 課長）



◆◆ ギャラリートーク ◆◆

第1回 2月23日(土) 各回とも 14:00～14:30

第2回 4月20日(土) ※先着各20名

第3回 5月11日(土)

会場：企画展示室 解説：当センター専門員

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL : 098-835-8751

入所無料

【開所時間】午前 9 時～午後 5 時（入所は午後 4 時 30 分まで）

【休所日】毎週月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）

年末年始、慰靈の日（6月23日）

※月曜日が祝日の際は、翌火曜日も休所